

ある日の暮方の事である。一人の下人^{げにん}が、羅生門^{らしやうもん}の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗^{にぬり}の剥^はげた、大きな円柱^{まるばしら}に、蟋蟀^{きりぎりす}が一匹とまつている。羅生門^{らしやうもん}が、朱雀大路^{すざくおおじ}にある以上は、この男のほかに、雨やみを^{いちめがさ}する市女笠^{いちめがさ}や揉烏帽子^{もみえぼし}が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風^{つじかぜ}とか火事とか饑饉^{うき}とか云う災^{わざわい}がつづいて起つた。そこで洛中^{らくちゆう}のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎^{うちくだ}いて、その丹^にがついたり、金銀の箔^{はく}がついたりした木を、路^{みち}ばたにつみ重ねて、薪^{たきぎ}の料^{しろう}に売つていたと云う事である。洛中^{らくちゆう}がその始末であるから、羅生門^{らしやうもん}の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸^{こり}が棲^すむ。盗人^{ぬすびと}が棲^すむ。とうとうしまいに、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉^{からす}がどこからか、たくさん集つて来た。昼間見ると、その鴉^{からす}が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾^{しび}のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻^{ごま}をまいたようにはつきり見えた。鴉^{からす}は、勿論、門の上にある死

人の肉を、啄^{ついば}みに来るのである。——もつとも今日は、刻限^{こくげん}が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉^{ふん}の糞^{ふん}が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖^{あお}の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰^{にきび}を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微^{すいび}していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申^{まの}の刻^{こく}下^{さが}りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差^あ当^あり明日^{あす}の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低

くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した葺の先に、重たくうす暗い雲を支えている。どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでゐる違はない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな噓をして、それから、大儀そうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつていた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚樂にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺うかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿うみを持った面砲まへびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括くくっていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛くもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいちにしながら、頸くびを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸しがいが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏こねて造った人形のように、口を開あいたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりし

た火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾おとしの如く黙っていた。下人げにんは、それらの死骸の腐爛ふらんした臭氣に思わず、鼻を掩おおった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覺を奪つてしまつたからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲うずくまっている人間を見た。檜皮色ひわだいいろの着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭がたまの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片きぎれを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時ざんじは呼吸いきをするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱しらみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考

えていた、餓死うえじにをするか盗人ぬすびとになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松きざれの木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわからなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾はじかれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞ふさいで、こう罵ののった。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ねじ倒した。丁度、鶏にわとりの脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払って、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼めだまを、眼球まぶたが眶まぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、唾しゅわねのように執拗しゅうねく黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後あとに残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己おれは檢非違使けいびいしの庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄なわをかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。睚まぶたの赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かしした。細い喉で、尖った喉仏のどぼとけの動いているのが見える。その時、その喉から、鴉からすの啼くような声が、喘あえぎ喘あえぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬘かすらにしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑おべつと一しよに、心の中へはいって来た。すると、その気色けしきが、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓ひきのつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人しびとの髪かみの毛けを抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇へびを四寸しすんばかりずつに切つて干したのを、干魚ほしうおだと云うて、太刀帯たておきの陣じんへ売りに往いんだわ。疫病えやみにかかつて死ななんだら、今でも売りに往いんでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯たておきどもが、欠かさず菜料さいりょうに買かつていたそうなの。わしは、この女のした事が悪いとは思おもうていぬ。せねば、餓死がしをするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思おもわぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死がしをするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知しっていたこの女は、大方わしのする事も大目に見みてくれるのである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬ほに膿うみを持もった大きな面炮めんぱうを気にしながら、聞いてい

るのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇氣が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちら云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るあざけような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮にきびから離して、老婆の襟上えりがみをつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己おれが引剥ひきはぎをしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸ひわだいろの上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、また燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪しらがを倒さかさまにして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方^{ゆくえ}は、誰も知らない。

（大正四年九月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1997（平成9）年4月15日第14刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第一巻」筑摩書房

1971（昭和46）年3月5日初版第1刷発行

初出：「帝国文学」

1915（大正4）年11月号

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年10月29日公開

2022年7月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。